如来性起経典の怪

――その正体をめぐる常盤・高峰説への疑義――

鍵主良敬

一

華厳経性起品の教理的理解については、すでにいささかの論考①を試みた。その過程において生じてきたさまざまな課題については、紙数の都合もあって十分意を尽すことはできなかったが、その中で特に注意を引かれたものに「性起品」の翻訳をめぐっての問題があった。教理用語としての「性起」なる語と、その意味内容についての考察、及び「如来性起品」と名づけられた経の品名自体についての問題、それらが興味ある課題となっていたのである。また、旧訳で如来性起品と訳されたこの品は、新訳では如来出現品となるのであるが、それも性起思想を考察するについて見逃せないものであった。

それらの課題とも多少のかかわりをもちながら、今ここに取上げて論究しようとするのは、「性起」の名を冠せられた経典である。その経はすでに失われてしまったのであるが、諸種の経録によると一名「如来性起経」として知られており、華厳経性起品とも何らかの関連があると推定される経である。しかもその経は、必ずしも一経のことではなくて数経とも考えられ、あるいは数種の別名で呼ばれたとも思われる。そのように不思議な記録のみられるところから、ここではこの経に関連して考えなければならぬいくつかの経典を、一括して「如来性起経典」と名づけたいと思う。その名を次に列挙すれば左の四経である。

（大方広）如来性起経（欠）
（大方広）如来性起微密蔵経（欠）
如来秘密蔵経（欠？）

大方広如来秘密蔵経[2](存)

以上の四経はいかなる内容をもち、また相互にどのように関係するのか。そこに焦点を定めてみると、これらの経を旧訳華厳経如来性起品の同本異訳とする説と、それにまったく関説せず、別本として扱っている記録とがある。四経をめぐる経録及び諸論考の記述は大変錯綜しているのである。それ故、「如来性起経」ははたして性起品の同本異訳なのかどうか。その問題の究明も重要なものである。

しかも最終的には如来性起経と呼ばれた経典が、不可解な足跡を残しながら歴史の記録にその名を止めるのみになり、かつては確実に入蔵録に記載されて有本であることを示していながら、その存在を失わざるを得ないことになるのであるが、なぜそのような現象が起きたのか。そうならざるを得なかった経の正体とはいかなるものなのか。つまり、その正体についての「怪」とは、これらの四経相互間に、性起品との関係ばかりでなく、互いにその同・異について異なった見方があり、そのため「如来性起」と名づけられた経典の正体がまったく不明となっているので、それをどう考えればよいかをも検討してみたいのである。

以上の課題を明らかにするために、ここで取上げさせていただくのは、現時の学界が認めていると思われるほぼ通説と見なし得る見解であり、より具体的にいえば、この経に対して特にきわ立った対立を示している常盤大定・高峰了州両博士の研究[3]である。これらの諸説が依り処としている諸経録の記事は、これまであまり批判的にみられたことがないようである。しかし、そのためなのかどうか、それを唯一の根拠にして成立している両博士の立論には、それぞれ疑義を感じざるを得ない点がある。そこで、それらの説のどこに矛盾を感ずるか。なぜ賛成できないか。その点を指摘することによって、両説がどのように訂正さるべきかを解明してみたいのである。

ただし、この論稿では紙数が限られているので、両博士の説に対する疑義に中心を置いて考察をすすめざるを得ない。そのため、両博士の御考えから導き出された結論が陥っている諸矛盾の指摘を、ここでの主な内容とする。その場合、高峰説の依り処となっている賢首法蔵の見解[4]についても、そのままでは承服できない点をいくつか挙げることができるので、それについては特に子細な注意を払いながら、論旨を展開させたいと思っている。したがって、この経の正体をめぐって生じているさまざ

まな矛盾は、どのように考えれば解決するのか。それについて何らかの手がかりを示し得ると思われる推論の提示については、他の機会にゆずらざるを得ないことになる。

ところで思想の研究もその基礎になる資料の検討をおろそかにすることはできない。その意味ではここに取上げる問題も、単なる事象の追求やその解明による知的好奇心の満足というより、あらゆる研究にとって欠かせない基本的操作の一環である。つまり、教理的課題を究明するについても、それが成立してきた事実関係への詳密な考察と正当な理解を欠くならば、その基盤そのものが危険にさらされることになるからである。それ故、思想の成立基盤としての事実関係に対する絶えざる批判と吟味がなければ、より秀れた教理研究への結実ももたらされるものではない。そのように考えるところから、この論考は始められているといってよい。

二

現今の華厳学研究者が、性起品の異訳経について考えようとする場合には、その判断の規準を賢首法蔵の晩年の作とされる『華厳経伝記』巻第一[5]に置くのが普通である。そこに示される次のような記述がその後の歴史にはたした影響は絶大である。

如来興顕経四巻 是性起品無重頌偈仍将十忍品次後編之亦不題也　西晋元康年
竺法護訳
如来興現経一巻 与法護訳題彼品名広略為名　西晋沙門白法祖訳
大方広如来性起経二巻 序分是名号品現正説即是性起品　失訳
大方広如来性起微密蔵経二巻 与前同本異訳　西晋元康年出
不現訳人
右件経並是此経第七会中出

ここに挙げられた四経のうちでは、竺法護訳の如来興顕経のみが現存し、他の三訳は存在しない。その無存三訳のうち、白法祖訳とされる如来興現経は『歴代三宝紀[6]』(長房録)が如来興顕経一巻として始めて記録するものであり、その記事を踏襲するその後の経録に載せられているものである。この経は記録にのみあって現存した形跡のない経典であり、ここにいうごとき注記も法蔵が初めて行なうものである。また経名についても、各経録は興顕経とするが、法蔵のみ興現経としている。なぜ経名を変えたのか。故意にか、あるいは単なる誤りか。その理由については不明である。

以上のように無存の三経にはそれぞれ問題があるので

あるが、今は特に後の二経が関心の的である。そして、法蔵の意見に従うかぎりでは、性起経は旧華厳性起品の異訳として、独立して流伝していた経であることになる。そのため西尾京雄先生はかつて性起品の成立史的研究をすすめられた時、その論稿の題名を「佛教経典成立史上に於ける華厳、如来性起経について」[7]とされ、しかもその中で異訳本の項をもうけられて、先掲の『華厳伝』の記事をそのまま援用されている。そして『華厳伝』に記載されている現存しない三経にそのまま「五、如来興現経　六、大方広如来性起経　七、大方広如来性起微密蔵経」と番号を付されて、「此等のうち㈤は西晋恵帝の世（二九〇―三〇六）の訳出であり、㈥と㈦とは同視され、賢首は異訳と見ているが元康年間は西紀二九一年より二九九年に至る間である」とされたのである。

つまり、西尾先生は、『華厳伝』の記事に対して何らかの疑いをもたれたわけではないから、竺法護訳の如来興顕経ばかりでなく、その外にも古く三訳があったとする法蔵の説を認められたことになるのであり、そのため性起品が、性起経という単独の経典であったこと、及び現存しない三訳は西晋時代の訳であるとする『華厳伝』の記録をそのまま承認されたことになるのである。ただ㈥と㈦については、誰がどのような記録で同視しているのか。また、それに対して賢首はなぜ異訳としたのか。同視するのと異訳とするのとどちらが正しいのか。それらの問題については考え及ばれなかったようであるが、㈥と㈦を同一経の異名とする諸経録の記録を見れば簡単に判明することであるから[8]、同視している経録を注に挙げられなかった点は、それほどとがめるに値いしないともいえよう。ただ、諸経録と賢首との意見の相違については後でこの論考の一つの論点になるところであるから、読者の注意を喚起しておきたいところであり、西尾先生がこの点を何故無視されたのか、重要な課題を見逃されたのではないかという疑問をここで提起しておきたいのである。

以上のような西尾先生の御理解とほぼ軌を一にするものに高峰了州博士の御意見がある。博士は、より広く『出三蔵記集』『歴代三宝紀』『法経録』『大周録』『開元録』を参照された上で、『華厳伝』の記事を正当と認められ、「以上の記録によって、この品は支那では西紀第三世紀末に翻訳されてゐることを知るとともに、その内容が性起品の後に十忍品を附加せるものと名号品を序分として性起品を正説せるものとがあり、その題名は興

顕・興現[9]・性起（・点引用者）又は微密蔵などと訳されたことを知る[10]」といわれている。

すなわち高峰博士も、諸録の間にうかがわれる矛盾した記載に多少の疑問は感じられているようであるが、結局は『長房録』をそのまま認められて、白法祖訳如来興現経を西晋恵帝代の訳とされるのである。そして（三）如来性起経と（四）如来性起微密蔵経については「（三）（四）は〔費長房の記すところでは[11]〕これを同一経典と見るのみならず如来秘密蔵経をも同経として元康年間（二九一―二九九）の失訳としてゐる。法経は[12]（三）を三巻とし外に大方広如来秘密蔵経一巻を挙げてゐるが、後者は現存の別経を指すものでいまの（四）に当るものではなかろう。（三）（四）は僧祐[13]もこれを同一とし大周録[14]・開元録[15]も同様であるが、法蔵は右の如く異訳としてゐる。（三）は法蔵の記すところによれば、序文が名号品であって正説が性起品であった」とされて、諸録をそのまま肯定され、これらの矛盾した記載が何を意味しているのか、それらについて何ら考察を加えられることなく、先に引用した結論へと到達されているのである。

このように法蔵の『華厳伝』巻第一をそのまま認めて性起経を考え、あるいはそれによってその独立経典であったことを類推しようとする考え方は、『佛書解説大辞典』の「大方広如来性起微密蔵経」の項[16]によっても裏づけられ、近年では香川孝雄氏の次のような理解にも表われている。「……如来興顕経のみは独立した経典であり、内容は六十華厳で言えば如来性起品と十忍品を含むものである。この様に独立した経典が外にもあったと言うことが賢首によって伝えられている[17]」。

では、高峰博士の諸経録に対する御理解はこれで正しいのであろうか。すなわち性起経は、はたして西晋元康年代（二九一―二九九）に訳出された経典なのであろうか[18]。そうだとすると、これまでに見てきた諸録の間の矛盾した記事の意味するところは何であるのか。それらと関係しながら、後述するように如来性起経自体が入蔵録の中から抹殺されることになるという意外な結果がもたらされるのであるが、それは何故であるか。それが次の課題として追求されねばならぬものである。

そこでそれらの点を明らかにするためには、先ず法蔵没後約十八年にして成立する『開元釈教録』（智昇録）〔七三〇〕の記録に対する検討が重要になってくる。上述の問題のより鮮明な浮き彫りと、その記載相互間の奇妙な矛盾を解決し得る手がかりの把握とは、『開元録』の解

読によってより容易になるように思われるからである。

『宋高僧伝』[19]の撰者贊寧によって「経法之譜無'出'昇之右'矣」と評された智昇の編纂になる『開元釈教録』は、それ以前に成った諸録の誤謬欠陥を訂正し、諸経録の間の矛盾した記載を多年の苦心をはらって参校したものといわれ、[20]特にその入蔵経録はその後の大蔵経編纂の標準となったほど権威を認められた経録であるが、その巻第一に載せられている「後漢失訳」の項では、[21]如来性起経に関して次のような記載が述べられる。

長房等録後漢失訳、総有一百二十五部一百四十八巻。今以余六十六部七十一巻子細讎校非是失源、具述委由列之如左

佛遺日摩尼宝経漢支讖訳

（中略）

大方広如来性起微密蔵経二巻亦直云如来性起経是旧華厳経如来性起品

（中略）

右佛遺日下六十六部七十一巻、或翻訳有憑、或別生疑偽。今既尋知所拠故非漢代失源、同旧重編恐成繁雑、今並剛（＝删？）也。

長房録云、已上一百二十五部一百四十八巻、並僧祐律師出三蔵記撰、古旧二録及安録失源、幷新集所得失訳諸経巻部甚広、讎校群目蕪穢者衆、出入相交実難詮定、未覩経巻空閲名題、有入有源無入無訳、詳其初始非不有由、既渉遠年故附此末、冀後博識脱覩本流、希還正収以為有拠、澄澄法海使静波濤焉。

今尋長房此言未可依拠、委求同異如前所述

つまりこの項は、後漢失訳として『長房録』（歴代三宝紀）に記録された経典を批判的に検討した結果、六十六部七十一巻は失源とさるべきではないことが明らかになったとして、その根拠を示したものである。「大方広如来性起微密蔵経」についていえば、別名が如来性起経であり、旧訳華厳経の如来性起品のことであるというのである。そしてこれらの経は翻訳者の明らかになったものや、内容的に疑わしい点が生じたものなのであり、それらの拠り所を尋ねてみると漢代の失源でないことは明らかである。他の項に移すべきであるから旧録に準じてここに重出するのは繁雑に成ることが目に見えているが、強いてこの項に並列するのであり、『長房録』が『僧祐録』（出三蔵紀集）を根拠にして後漢に入れた理由には全く依るべきものがないというのである。

そして「西晋失訳」の項[22]では

方等陀羅尼経一巻
宝厳経一巻
五福徳経一巻
右三部三巻其本並闕　長房等録西晋失訳総八部一十五巻
云、呉別二録並単注元康年中出不顕訳人、詳覧群
録未見指的、所以別件猶殊失訳。今以余之五部一
十二巻検尋群録兼閲経文、皆有所憑即非失訳、具
述由委列之如左
度世品経六巻　阿耨達龍王経二巻是弘道広顕三昧経異名已上二経竺法護訳
如来秘密蔵経二巻一名大方広如来性起微密蔵経亦直云如来性起経是旧華厳経如来性起品後漢失訳已有此復重載誤之甚也今附別生録中　明相続解脱地波羅蜜経一巻宋求那跋陀羅訳
弟子学有三輩経一巻三品弟子経異名呉支謙訳

といって後漢の項と同じく『長房録』に依りつつ、それが失訳とした八部一十五巻のうち、三部三巻は確かにその本が不明であるが、その余の五部一十二巻は、群録を検尋し兼ねて経文を閲読した結果、憑り所のあることが判明したものであるから失訳ではないとする。しかも、「如来秘密蔵経」と呼ばれる経が、別名「大方広如来性起微密蔵経」とも、単に「如来性起経」ともいわれるという『長房録』の記載をそのまま採用し、それと共に後漢の項と同様に旧華厳経の如来性起品であることを述べて、後漢の失訳に已に有るものを此に重ねて載せるのは誤りも甚しいとして『長房録』の粗雑さを痛烈に批判する。そしてこの経は、性起品の抄出にすぎないから華厳経の別生録中に附載することにしてこの項から削除する、といっているのである。

ついで「大乗別生経録」の華厳経関連の項では[23]

大方広如来性起微密蔵経二巻是旧華厳経如来性起全一品　新編上
華厳経十種生法経一巻
佛名経一巻
菩薩名経一巻
浄行品経一巻
抄華厳経一巻
菩薩十地経一巻抄出
已上七経並出旧華厳経
曇昧摩提菩薩説経一巻法経録云出菩薩十住行道品
金剛蔵問菩薩行経一巻出漸備一切智徳経
漸備経一巻出漸備一切智徳経
大方広如来性起経下一十部一十一巻
華厳部中別生経

といって、この経の内容は旧華厳経の如来性起品全一品のことであり、大方広如来性起経と呼ぶことも可能であ

るとする。そして、「別録中刪略繁重録」[24]においては次のような見解を示している。

刪繁録者、謂同本異名、或広中略出、以為繁賸今並刪除、但以年歳久淹共伝訛替、徒盈巻帙有費功労、今者詳挍異同甄明得失、具為条目有可観焉

新括出別生経六十七部一百八十五巻

（中略）

大方広如来性起微密蔵経二巻

右一経、即是旧華厳経宝王如来性起品別出流行、初加証信序、及取第二会初縁起置之於首。長房等録並云、西晋失訳者謬也

しかも『開元録』は華厳部の重訳経二十六部をあげる中で「如来興顕経」については次のように注記している。[25]

如来興顕経四巻一名興顕如幻経

西晋三蔵竺法護訳

右一経是旧華厳宝王如来性起品及十忍品異訳従第三十五巻半至第三十七巻尽其十忍品在第三十巻此略無偈不知何故前後差異

新経名如来出現品従第五十巻至第五十二其十忍品在第四十四旧録中又有如来性起微密蔵経二巻即是旧経性起品抄出別行其文不異但取第二会初縁起標於経首加証信序既非別翻故不重載

このような見解を参照しながら先述したごとき一連の記述からもたらされる結論として智昇が如来性起経について特にその内容をどのように考えていたかを整理してみるとほぼ次のようになるであろう。

1、後漢の失訳とする長房録の記事は誤りである。

2、西晋元康年中の失訳とする説も誤りである。なぜなら旧華厳性起品の抄出にすぎないのであるから。また後漢と西晋に重載するのは誤りの最たるものである。

3、この経の内容は、旧華厳性起品を抄出して別行させたものであり、その文は性起品と異ならない。ただ第二会（名号品）の初の縁起を取りきたって経の首めに標し、その前に証信序を加えただけのものであるから、別しての翻訳ではない。したがって、改めて載せる必要のないものである。

4、この経の内容は旧華厳如来性起品の全一品である。

開元録は性起経を以上のように理解しているので、同本の異名とか広の中より略出されたものは、いたづらに巻帙を盈し功労を費すだけで益がない。したがって同異を詳校し得失を明らかにして繁雑な箇所を削略すれば、この経は性起品の抄出にすぎないから、入蔵録に記載して後世に残す必要のないものとなる、との結論に達することになる。

かくして如来性起経は、永久に入蔵経録の中から削除

されることになるのであるが、如来性起経とはそもそも旧訳華厳経性起品と同一内容の経典であり、本来削除されて然るべきものだったのであろうか。その経が開元十八年(七三〇)までほぼ三百年の長きにわたって、いらざる繁重を重ねてきたことになるのであろうか。いかに歴史は不可解な要素をもつとはいえ、はたしてそのようなことが現実に起り得ることなのであろうか。

三

『開元録』における以上のごとき記載は、明らかに高峰博士の理解と一致しないものである。すなわち『開元録』を認めるかぎり、博士の西晋失訳説はあり得べからざることになり、性起品がこの経の内容であるという点のみが、その記録によって裏づけられているにすぎないことになるのである。しかし『開元録』の記録はそのまま肯定されていいものかどうか。それには多少の疑問が残らぬわけではない。つまりその信憑性をどの程度に評価すべきかについては、意見の分れるところだからである。しかも『開元録』では、名号品と証信序が性起品に付加されていると述べている箇処の外に、性起品全一品であるとしている処もあるのであるから、これをどう理解すべきかについても、より詳細な検討が加えられねばならぬであろう。

それらの点を考え合わせると、高峰博士は『開元録』の記事を認めて性起品の抄出(抜き書き)が性起経であると理解されながら、なおかつ西晋失訳説を述べられたことになるのであるが、これは何を意味しているのか。それが改めて問われねばならぬ課題になる。すなわち博士の説は何に裏づけられて成立可能となっているかを検討しなければならぬことになるのであるが、その点を確かめてみると、それは僧祐等の諸録にも依られているからそのように主張できるのであって、その意味では全面的に『開元録』を認めてはいないことが明らかになるのである。つまり、最も信頼できる経録として定評のあるこの録にも、いろいろ問題が含まれているということである。

では『開元録』のどこがおかしいのか。また、博士の説は逆にすべて肯定され得るのか。『開元録』の性起品抄出別行説を認めつつなおそれが西晋失訳であると主張するのは、幾分の根拠があるとはいえあまりにも矛盾した説であり、その点では『開元録』のように、東晋以後——性起品訳出(四二〇)以後——に改訂してしまう方が

よほど筋の通った理解になると思われる。しかもその『開元録』に問題があるとすると、これら両説の差異をいかに考え、どちらを正とすべきであろうか。

かくて問題は重要な岐路にさしかかったことになる。そこで、これら両者の矛盾を解決するものとして、有力な手がかりになると思われるのは、高峰博士が西晋と推定せざるを得なかった性起経の正体を、旧訳華厳経性起品ではなかったとすることであり、そのように考えるのが常盤大定博士である。常盤博士はその畢生の労作である『後漢より宋斉に至る訳経総録』において、高峰説やその論拠となっている『開元録』の理解と全く背反する説を立てられる。すなわち博士は『僧祐録』の「新集続撰失訳雑経録㉖」に記載されている次の如き記録

大方広如来性起微密蔵経二巻或云如来性起経

と、『長房録』の「後漢失訳」㉗の項にある次の記事

如来性起経二巻一名大方広如来性起微密蔵経㉘

同じく「西晋失訳」の項に

如来秘密蔵経二巻一名大方広如来性起微密蔵経、亦直云如来性起経

とある記事に対応されて『開元録』の代録を重点的に探査された結果、この経に対して次のような結論㉙を導き出されているのである。

一二、大方広如来秘密蔵経二巻

（現存）縮（宇一〇）正（一七・八三七）

昇は三秦失訳中に初めて之を録し、大周録に大方等如来蔵経と同本といへるは、非なりとし、而して見入蔵とす。

〔案〕―**祐**の失訳雑経録中に「大方広如来性起微密経」二巻あり。**房**は後漢失訳中に「如来性起経」一名如来性起微密蔵経を挙げ、**昇**は之を承けて、亦直云如来性起経とし、是旧華厳経如来性起品なりとす。**房**は更に西晋失訳中に「如来秘密蔵経」二巻を出して、一名如来性起微密蔵経なりとし、**昇**は此経既に後漢失訳中にあれば、重載すべからずとし、今は別生録中に附すとす。

以上によって之を見るに「秘密蔵経」と「微密蔵経」とは、蓋し同本なり。**房**は之を後漢失訳及び西晋失訳の二処に出し、**昇**は後漢失訳を認めて、西晋失訳を削り、而して今また三秦失訳中に出す。これ必ず同本なれば、独り西晋失訳を削るのみならず、後漢失訳をも削り去りて、三秦失訳のみを保するを可とすべし。すなわち、博士の推論を整理するとするならば、次のように理解してよいであろう。

1、僧祐録の新集続撰失訳雑経録に入れられている大方広如来性起微密蔵経二巻或云如来性起経が房録・昇録において、後漢失訳に配当されている。

2、房録はこれを呉別二録によって元康年の所出とし西晋失訳にも入れて如来秘密蔵経とも呼んでいる。これに対し昇録は、後漢失訳に已に有る以上重複であるとして西晋失訳より之を削っている。

3、昇録が三秦失訳に再出している大方広如来秘密蔵経がこの経であると推定されるから、それならば現存する。如来秘密蔵経は智昇によって初めて三秦失訳中に録された。

4、昇録は是の経を旧訳華厳経の如来性起品であるとし、別生録中に附すとしている。

5、この経について、智昇は後漢失訳としているけれども、多分三秦失訳であろうから、後漢の失訳の項から削るべきである。また、西晋失訳の項からも削るべきである。

6、「秘密蔵経」と「微密蔵経」とは同本（同経）に違いない。

以上の所説によるならば、常盤博士は性起経を性起品の抄出とする『開元録』の記事を知りながら、あえてそれを無視されて、『僧祐録』や『長房録』に依ってこの経の内容を推定すべきだと考えられたことになる。では、このような推論の方向は、高峰博士の御理解とどのように関連するであろうか。それについて考察をすすめるために、さしあたって常盤説の誤りと思われる諸点を指摘し、それを抽出することから始めよう。

常盤博士の理解の示している疑問点の第一は、『開元録』をみながらその代録に重点を置きすぎ、しかもその注記[20]を見逃したために、『開元録』は西晋失訳を排除して後漢失訳を認めたというごとき誤った結論に立ち至ったことである。

すでに明らかにしたように、智昇は『長房録』がこの経について述べる後漢失訳説を全面的に否定しているのであり、その根拠はこの経を旧訳華厳経宝王如来性起品の抄出にすぎないと考えたからであった。この理由によって智昇は、如来性起経の西晋失訳説をも否定するのであるが、博士はその理由を無視されたために、西晋を否定したのは後漢を肯定するためであったと誤解されたのである。

したがって第二には、『開元録』が推論の根拠にしている旧華厳性起品の抄出説を全く無視されて、性起経は

「大方広如来秘密蔵経」のことであると考えてしまったことである。それによって、二重の誤りが犯されることになったのである。

そして第三には、すでに『長房録』の見入蔵録[31]において、「大方広如来性起経」三巻と「大方広如来秘密蔵経」一巻が、別経として並列されているにもかかわらず――このような並列は『法経録[32]』等の信頼できる諸経録においてもなされていることであるが――最初に下された推定を疑おうとされなかったために、あえて両経を同一経と断定されたことである。

『長房録』の入蔵録が二経になっているのは『法経録』の影響であるとの説[33]もあるが、少なくとも当時の現存経典としての両経の存在は、疑えないものと思われる。したがって、単なる記録の集成としては同一経にみえる点があったとしても、それはすでに事実と異なっていたことになるのである。その点の混同が重大な誤りの犯される原因になったといってよいであろう。つまり、博士の推論の根拠として重要な役割をはたしている『長房録』の記録は、別の観点[34]から評価さるべきなのであるが、その点を曖昧にしたままで直ちに両経同一説の論拠にしてしまったところに問題があるというべきである。

それ故第四には、博士が推定された「如来性起経」の三秦失訳説は成立しないことになる。すなわち、この経と「大方広如来秘密蔵経」とは全く別の経典とみなし得る可能性が生まれてくることによって、同経であってこそ成り立っていた博士の立論の根拠そのものがくずれ去ってしまうからである。

しかしこの両経は、高峰説のように完全に別経であるといってしまっていいものかどうか。そこには更に詳細な検討を要する問題が伏在していると思われる。

四

前節で提示された問題に答えるためには、まず大方広如来秘密蔵経について考えなければならない。ではこの経はいかなる経典であり、諸経録はこの経をどのように取扱っているであろうか。性起経の場合には「大方広」が付いても付かなくても、同一経となっているのであるが、この経にかぎり、「大方広」の付加された経典と、それのない経典とは別であるということになるのであろうか。それを同一経としている法蔵の例もあるところからみると、両経を同一とする見方もあったことになり、如来秘密蔵経とは大方広如来性起微密蔵経のことである

とする『長房録』の記録をどのように理解すべきかも問題になってこよう。すなわち、常盤説にも重大な欠陥はあるが、だからといって直ちに高峰説が正当であることにはならないのである。両説の違いは経録に対する視点の定め方の相異にすぎないのである。たとえば『華厳伝』『開元録』及びそれらに依拠している高峰説を認めるとした場合、そこから派生してくる次の如き矛盾をどう考えるべきかについての結論はそれほど簡単に出てくるものとは思われない。

第一、高峰博士は『開元録』によって推論を組み立てながら、なぜ西晋失訳説を認めざるを得なかったのであろうか。『開元録』に「即是旧経性起品抄出別行其文不異。……既非=別翻-故不=重載-」[注]といわれて、性起品の抄出にすぎないとされる経が、東晋以前にほぼ同一内容で訳されていたと本気で考えられたのであろうか。誠に不可解な推定である。つまり博士は、一方に立てば他方に立つべきではない両説をそれぞれ認められた結果、このような矛盾を犯すことになったのである。『開元録』の立場に立つならば、その説のみによって西晋失訳説をも否定すべきである。

ただし、『開元録』と他の経録との間には決定的な矛盾があるのであるから、それらを検討してこの経の成立を西晋とも考え得る根拠を明らかにすべきである点は、別の課題として残されているであろう。すなわち、『長房録』に記されている呉録・別録の資料的価値をどのように評価するかについてはいろいろ問題があり、その存在を無碍に否定できない点があるからである。その点では『長房録』と『開元録』との間に、それが同一経典について記している記録とは、到底認めにくい面もあるのである。それにもかかわらず博士はその矛盾を無理に会通してしまったことになるのであるが、そこから生じた誤解が先述のごとき錯綜を犯すことになったと思われる。

第二、高峰博士のいうように性起経が性起品の抄出もしくは別訳であるとするならば、『華厳伝』及び『開元録』以外の諸経録は、何故にこの経を性起品の別訳とせず、あまつさえ華厳経関係の重訳経にさえ入れないのであろうか。『開元録』以前の諸経録の中で性起経を華厳経関係の経典として認めるのは『大周録』[注]をもって唯一の例とするという不思議な現象は何故におこっているのであろうか。『長房録』のように粗雑な分類を行なった経録——ただしこの経録には重訳経の項はないが——ならいざ知らず、『彦琮録』のように『法経録』等の欠陥

を補って厳密な検討を加えている経録までもこの経を華厳経に無関係としている理由が不明になる。

第三、また博士は、微密蔵経と秘密蔵経との関係について「……しかし性起品の別翻一本としての彼（法蔵）の引用する如来秘密蔵経の一節を見るが、これは現存の失訳なる大方広如来秘密蔵経二巻の一部に相当するものであって性起品の異訳ではない。果して微密蔵経と秘密蔵経とは同じ性起品の翻訳であったか。前者は性起品の翻訳であったが後者は現存するものの如く別個の経典と見るべきであろう。[37]」と考えられているのであるが、これでは法蔵の犯した矛盾に対する何の批判にもならないばかりでなく、『探玄記』中の錯綜した記事[38]が何故生じたかについての疑問も何ら解決しなくなる。その意味では、「大方広」があるかないかだけのことならば、秘密蔵経も大方広如来秘密蔵経も同じであり、ひいては微密蔵経とも同一経であるとする常盤説の方が、妥当であることにもなってこよう。

そこでこれらの矛盾解決の手がかりとして、諸経録の「如来秘密蔵経」に対する記録を検討してみると、ほぼ次のように整理することができる。

1、『僧祐録』にはこの経がなく、『法経録[39]』に至って始めて如来性起経三巻とは別個の一巻の単一経として登場してくる。

2、『長房録』は、当時の記録を無差別に集収したと思われる代録[40]においては、如来秘密蔵経が別名如来性起経であり大方広如来性起微密蔵経でもあると記しているが、入蔵録[41]では『法経録』と同様に別経として並列している。

3、最も信頼されるとして定評のある『彦琮録[42]』も『法経録』と同様の取扱いであり、それを受けたとされる『静泰録[43]』では

大方広如来性起経二巻或三巻五十一紙

（中略）

大方広如来秘密蔵経二巻二十四紙

として紙数まで挙げている。

4、『内典録』では代録[44]は『長房録』に順じているが、重・単訳経名中の失訳録[45]では『静泰録』と同じ取扱いをする。

5、『大周録[46]』ではこの経が大方広如来蔵経の同本異訳とするが、『開元録』がそれを否定して、三秦代新旧諸失訳経[47]中において

大方広如来秘密蔵経二巻大周録云与大方等如来蔵経同本者非也

（中略）

右二十部六十五巻、並是見入蔵経、似是秦時訳出数本経中並有秦言之字諸失訳録並未曾載、今附此秦録、庶免遺漏焉

というのである。常盤博士はこの『開元録』の記事によって先述したごとく性起経をも三秦代の訳出と決定されたのである。

五

では常盤説は、以上の諸欠点によって完全なる誤りとなり、『華厳伝』や『開元録』『貞元録』等による高峰説の方がまだしもすぐれていることになるのであろうか。しかし、その高峰説では、先に見たように『開元録』以外の諸経録の記事を正当に評価できなくなり、それらの間の種々の矛盾も解決できないのであるから、直ちにそれを支持するのは正しくない。そこで高峰説の有力な根拠になっている賢首法蔵のこれらの経に対する見解を参照すると、それは次のようにまとめられよう。

1、法蔵は『探玄記』巻第一において華厳経の支流をあげる場合に、性起品の異訳経が大方広如来性起微密蔵経であるとする。[48]

2、同じく巻第十六[49]では如来秘密蔵経と如来興顕経が性起品の別翻とする。

3、同巻で引用する如来秘密蔵経は現存の大方広如来秘密蔵経であり、性起品の別訳ではない。

4、『華厳伝』では大方広如来性起経二巻が性起品に名号品が附加された性起品の失訳異訳経であるとする。しかも年代については何も記さない。

5、同伝では、その他に大方広如来性起微密蔵経二巻があり、それは西晋元康年中の訳出で失訳、しかも性起品の同本異訳とする。

以上の記述から明らかになる法蔵の性起経に対する理解とその矛盾は次の諸点となるであろう。

第一、大方広如来性起微密蔵経が別名如来秘密蔵経であり、大方広如来秘密蔵経というも同じである。

第二、その経が西晋元康年訳出の失訳経である。

第三、その内容は性起品の同本異訳である。

第四、その他に大方広如来性起経という性起品の異訳経があり、その経には名号品が附加されている。

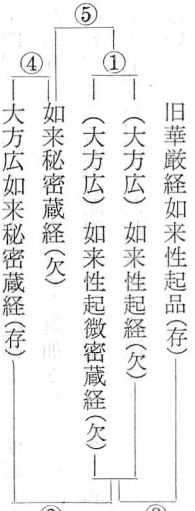
第五、ところが、記録としては先述のように記しながら事実上彼が引用した如来秘密蔵経は性起品の異訳経ではない。

それらの矛盾を重視するならば、高峰博士のように別経と推定する外ないであろうが、それでは何故法蔵はわ

ざわざそのような経典を性起品の注釈に引用し、しかも性起品の異訳経と主張したのか。その理由が不明になる。法蔵の記述を見るかぎりでは、同一経として扱っていることが明白であり、内容に関する点を除外するならば常盤博士の説が有力になってくる。したがって、決定的な矛盾をさらけだしながら、現存する如来秘密蔵経を性起品の異訳として無理に通そうとしたとでも考えなければ、収拾のつかぬ点が生じてしまうようにも思われる。

つまり、先に見たごとき高峰説の矛盾も、その依り処となっている法蔵の記述自体に矛盾があるところから生じたものであり、その点を無批判に受け入れてしまったための当然の帰結であるともいえるであろう。では、何故法蔵はそのように強引な主張をしなければならなかったのか。いささか強牽附会の感なしとしないこのような記述も、単なる錯覚のなせるところであり、法蔵にしてかかる誤りを犯すこともあり得るとの端的な例証にすぎないのであろうか。それとも常盤博士の推察通り、性起経と秘密蔵経とは全く同一の経典であるから、法蔵はこのような書き方をしたのであろうか。

以上のごとき疑問点を踏まえながら、先に掲げた如来性起経典四経と旧華厳性起品それぞれの間の同・異両説の差違、及びそれを主張する人名の主なるものを図示すると次のように整理できよう。



①—同経説　僧祐・長房・法経・彦琮・静泰・智昇
—異経説　法蔵(華厳伝)・智昇?(名号品と全一品)

②—同経説　法蔵(探玄記)?・常盤
—異経説　長房(入蔵録)・法経・彦琮・静泰・高峰

③—同経説　法蔵(華厳伝・探玄記)・智昇・円照(貞元録)
—異経説(積極的関係を記さぬもの)法経・彦琮・静泰

④同経説　法蔵(探玄記中の引用経)

⑤同経説　長房(代録)・智昇(西晋の項)・常盤

以上の図解と関係して生じてくる疑問は次の諸点である。

第一、法蔵は何故「性起経」と「微密蔵経」とを別本としたのであろうか。諸経録を探査したところ、「性起経」と記するものもあり、「微密蔵経」と記するものもあったから、それによって別本としたと考えられぬこと

もない。しかし、それならば経録には両経を同本異名ともしているのであるから、諸録の記録のみで別本としたと見るのは無理なところがある。したがって、華厳伝編纂の時期には両本があったから別本としたとしか考えられなくなってくる。では本来同一経であるとの記録もある経典が、何時いかなる理由で別の経とされることになったのか。

第二、性起経の内容が旧訳華厳経性起品と一致するならば、諸経録は何故これを性起品の別訳とせず、あまつさえ華厳経関係の経典とさえもしなかったのであろうか。

第三、法蔵は何故、性起品と無関係な経典を性起品の異訳経であるかのような書き方で探玄記の中に引用しているのであろうか。

第四、性起品の抄出にすぎないといわれる経典が、どうして西晋（又は後漢）代の訳とされることになったのであろうか。長房録の記録が信頼できないという定説は認めざるを得ないとしても、彼が依り処とした呉録別録の記事は一顧も与えられる価値のない経録になるのであろうか。

第五、『大周録』[50]は何を根拠にして始めて如来性起経を華厳経関連経典の末尾に加えたのであろうか。

第六、如来秘密蔵経別名如来性起経と大方広如来秘密蔵経とは、はたして別の経典なのであろうか。異なるにしてはあまりにも経名が近似しすぎている。また、同じと考えるにはあまりにも不可解な謎を孕みすぎているとも思われる。

以上の諸点が如来性起経典と名づけ得る数経をめぐる諸経録の記載から生じてくる問題点であり、それらを依り処として先学[51]が提起された結論に対する疑義である。これらのすべてを解決し得る推論ははたして成立し得るのかどうか。それが大きな課題となって最後に残されたことになるのであるが、それを詳しく論証するためには、かなり複雑な手続が必要である。したがって、それらについては、別に稿を改めて論じなければならないと思っている。

註① 拙論「華厳経性起品の研究」（大谷大学研究年報第25集所載）

② 四経のうち前三経は現存しないが、最後の大方広如来秘密蔵経のみは大正蔵経・経集部四（大正17・八三七・b）中に失訳二巻の経典として収録されている。

この経がはたして前三経と内容的に一致するのかどうかは問題なのであるが、それを関連させて考える説があるので、ここでは一括して如来性起経典の中に含ませた。

③ 常盤大定著「後漢より宋斉に至る訳経総録」と高峰了州著「如来と世界――華厳経如来性起品の研究」中におけるこの経についての論考を中心に考察をすすめる。なお、西尾京雄「佛教経典成立史上における華厳如来性起経について」（大谷大学研究年報第二輯）香川孝雄「大乗佛教思想の研究――華厳経如来性起品について――」（佛教論叢第11号）、坂本幸男「国訳探玄記の注」（経疏部六・一二四頁）各氏の御理解は高峰説に同じであるから、そこに含ませる。

④ 華厳伝巻第一、探玄記巻第一、巻第十六等。

⑤ 巻第一（大正51・一五五・c）。なお新羅の崔致遠編『唐大薦福寺故寺主翻経大徳法蔵和尚伝』（大正50・二八三・a）には「緝華厳伝五巻、或名纂霊記（此記未畢而逝。門人慧苑慧英等続之別加論賛。文極省約所益無幾。）」とあるから、法蔵の没年（七一二）頃の作とみなしてよいであろう。

⑥ 巻第六（大正49・六六・b）に如来興顕経一巻を含む二十三経が、恵帝の世に河内沙門白法祖により訳出されたと記し、ついで「高僧伝止云祖出一経、然其所出諸経遭世擾攘名録罕存、莫紀其実、房広捜検諸雑記録、見此二十二経、並注祖出、今依所覩備而載之」という。この記事がどれだけ信頼できるかは別にして、法蔵がこれによって華厳伝を作成していることは誤りない。

⑦ 大谷大学研究年報第二輯一五五頁

⑧ 出三蔵記集巻第四（大正55・二一・c）を始めとして、歴代三宝紀巻第六（大正49・六八・a）、大唐内典録巻第二（大正55・二三九・c）などによってもそれが判明する。

⑨ 先に見たごとく、如来興現経という経名は、法蔵のみの記すところであり、他の記録はすべて興顕経となっている。それらの記録を知りながら、それを捨てて法蔵の意見を採り、古く興現と訳されたこともあったとされる博士の論拠が何に依られたものなのか、ここだけでは不明である。

⑩ 『如来と世界――華厳経如来性起品の研究――』六六頁。

⑪ 歴代三宝紀巻第六（大正49・六八・a）西晋失訳経録の記事による。

⑫ 法経録巻第一、衆経失訳の項（大正55・一二二・a）

⑬ 前掲注⑧参照。

⑭ 大周刊定衆経目録巻第二（大正55・三八一・a）

⑮ 開元釈教録は巻第一（大正55・四八四・c）、巻第二（同・五〇一・b）において両経が同一経の別名であるとする。

⑯ 佛書解説大辞典巻七（四六四頁）は、出三蔵記第四、法経録第一、開元録第十六・十七、貞元録第二十六を参考としてあげ、この経を旧華厳経如来性起品の抄出失訳経とする。

⑰ 「大乗佛教思想の研究――華厳経如来性起品について――」（佛教論叢第11号一二四頁）この一文に対する同氏の註記にはそのまま華厳伝巻一があげられている。

⑱ この経の訳出が東晋以前であるか否かの問題については、別に稿を改めて論ずる予定である。

⑲ 宋高僧伝巻第五（大正50・七三四・a）

⑳ 佛書解説大辞典巻二・三八頁、林屋博士の解説等参照。

㉑ 開元釈教録巻第一（大正55・四八四b～四八五b）

㉒ 前同（大正55・五〇一・b～c）

㉓ 前同巻第十六（大正55・六五二・b～c）。この大乗別

生経の項では、如来性起微密蔵経が旧華厳如来性起品の全一品であるとして、名号品との関係を何も述べないところに特徴がうかがわれる。また、末尾の補説では如来性起経と呼んでいるが、その点には多少の問題が感ぜられる。

㉔ 前同巻第十七（大正55・六六二・a～b）

㉕ 前同巻第十一（大正55・五九〇・c）。尚、貞元録巻第二十一（大正55・九二〇・c）も同一の記載をなす。

㉖ 出三蔵記集巻第四（大正55・二一・c）

㉗ 歴代三宝紀巻第四（大正49・五四・b）

㉘ 前同巻第六（大正49・六八・a）

㉙ 「後漢より宋斉に至る訳経総録」八九四頁。

なお、二一九、三七五、三八二、四五四、五四三、七三〇の各頁においても、この結論に相当する見解が部分的に述べられている。

㉚ 開元釈教録巻第一（大正55・四八四b―四八五a）

「長房等録後漢失訳、総有一百二十五部一百四十八巻、今以余六十六部七十一巻子細讎校非是失源、具述委由列之如左、……右佛遺日下六十六部七十二巻、或翻訳有憑、或別生疑偽今既尋知所拠故非漢代失源」

㉛ 歴代三宝紀巻第十三、（大正49・一一二・b、c）

㉜ 法経録巻第一（大正55・一二〇・b、c）、彦琮録巻第一（大正55・一五二・c）、静泰録巻第一（大正55・一八三・a、b）

㉝ 佛書解説大辞典第十一巻、二九一頁、歴代三宝紀に対する林屋博士の解説参照。

㉞ 歴代三宝紀の価値は、当時現存したと思われる諸雑録の無差別な集成による素材的価値にあるとする前注林屋博士の説、及び「支那佛教史講話上巻」（一五一～一五七頁）の境野博士の説等参照。

㉟ 開元釈教録巻第十一（大正55・五九〇・c）

㊱ 大周刊定衆経目録巻第二（大正55・三八一・a）の華厳経関連経典の項には、その第三十経目に「大方広如来性起経一部二巻一名大方広如来性微密蔵経五十一紙」とあり、ここに到ってこの経が始めて華厳経の別訳経中に編入されたことになる。ただし何品の別訳かは明示されず、また別名としての微密蔵経についても、如来性とあって「起」は脱落している。

㊲ 前掲書六五頁

㊳ 探玄記巻第一（大正35・一二三・a）には「如来性起微密蔵経両巻是性起品」とあり、これは華厳伝巻第一（大正51・一五五・c）の記載と一致する。

ついで法蔵は探玄記巻第十六で性起品の別訳経を記す場合「又別翻一本名如来秘密蔵経、又一本名如来興顕経」（大正35・四〇五・a）として、如来秘密蔵経が性起品の別訳であるとしながら、次下にその経を「如来秘密蔵経……」（大正35・四一六・b）として引用する場合には、現存する大方広如来秘密蔵経巻下（大正17・八四三・a）に相当する文となっている。この経は性起品とは全く無関係な経典である。

㊴ 法経録巻第一（大正55・一二〇・b、c）

㊵ 歴代三宝紀巻第六（大正49・六八・a）

㊶ 前注㉛参照。

㊷ 彦琮録巻第一（大正55・一五二・c）

㊸ 静泰録巻第一（大正55・一八三・a、b）
㊹ 大唐内典録巻第二（大正55・二三九・c）
㊺ 前同巻第六（大正55・二八九・a、b）
㊻ 大周刊定衆経目録巻第五（大正55・三九八・a～b）
㊼ 開元釈教録巻第四（大正55・五一八・c～五一九・a）
㊽ 前注㊳参照。この場合には何故か如来興顕経をあげていない。
㊾ 前注㊳参照。
㊿ 前注㊱参照。
(51) この論文で取上げた先学の諸論考の外に石井教道博士の説がある。博士はその遺稿『華厳教学成立史』（一〇二～一〇六頁）の中で、この経典に関するすべての経録の記述を集められ、その記録がどのように変化してきているかを指摘されている。つまり、この経についての諸録の記載の相異点を示されて、その事実関係を明されているのである。したがってそれは、常盤・高峰両博士への批判という形でなされているわけではなく、また先に提起したこの経の記録をめぐって生ずる諸矛盾への積極的な解答を示されているわけでもないので、ここではあえて関説しなかった。